

## 釧路空襲体験談

吉田 節子

昭和14年3月生まれで、空襲のときは小学校1年生でした。旭小学校に通っており、白山湯という銭湯の裏にある家に住んでいました。空襲前は防空頭巾をかぶって通学しており、しばらくは飛行機の音がすると帰宅して、防空壕に入る生活が続きました。

旭小学校は空襲被害が大きかった学校で、燃えてしまい、通学できない状況でした。しかし当時は、もう授業の心配どころではありませんでした。

自宅には防空壕が掘ってあり、近所の人も集まれるほどの大きさでした。防空壕の中は泥だらけで、長靴を履いてもぐちゃぐちゃしており、座るために丸太を倒して置いたり、子どもたちを寝かすために木で作った二段ベッドを置いたりしていました。防空壕の中にも、外で爆風が起これば扉が開いてしまうので、何十人かの男手で塞いでいましたが、それでも中に炎が入ってくることもありました。子どもたちはベッドを与えられていましたが、大きな音がすると目覚めてしまい、全然休めませんでした。

旭町が燃えて防空壕が使えなくなってしまったとき、鳥取にいる姉のアパートに家族で身を寄せました。夜道では、燃えないように泥水に漬けた毛布にくるまって父の背中に乗っていました。防空壕にいたときも、父の背中にいたときも、不思議と「怖い」「恐ろしい」という感情はありませんでした。当時は、飛行機の音で下校する生活も普通のことだと思っていたのかもしれませんが。

姉のアパートに移動してから数日後、父、母、姉、そして自分の四人で、阿寒にいる叔父の家に疎開しました。もう汽車は動けない状況だったので、線路をたどって徒歩で移動しました。まともな荷物はすべて旭町の実家で燃えてしまったので持っておらず、移動中は頭上に飛行機が通ると、草むらや防空壕に身を隠しました。

一番怖かった記憶があるのは、阿寒に向かう道中、線路だけの鉄橋があり、下には川が流れていて、手すりもない中で渡らなければならなかったことでした。結局どう乗り

越えたかは覚えていませんが、足がすくんでなかなか前に進めなかったのは覚えていません。

阿寒に到着してからは、叔父の家の裏にある物置小屋を借りて住んでいました。そこに住みながら農業をして生計を立て、手に入れた畑で小豆や大豆などの穀物を育て、市内で買ってもらっていました。農業をしていたので食べ物にはそれほど困りませんでした。お米は貴重でしたので、お米にイナキビやイモを細かく切ったものを混ぜて食べていました。

しばらく生活していましたが、ある日洪水が来て穀物をすべて流されてしまったため、釧路に戻るようになりました。

元の実家のあたりに父が蔵を建て、自分のピアノや魚などをしまっておきました。数日後の様子を見に行くと、熱風が入り込んでいたようで、ピアノは傷み、魚は燻製になっていました。

ある日、家族で外出して家に帰ると、家の中に知らない男の子がいて、釜の中に手を入れてお米を食べていました。その光景にとっても驚いたことを、今でも覚えています。